

[012] 総合文化学論輯表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4370217>

出版情報：総合文化学論輯. 12, 2020-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：

第18回総合文化学会

日時:2019年11月9日(土) 午前10時~午前11時45分

場所:福岡市男女共同参画センターアミカス視聴覚室

(Phone: 092-526-3755)

(西鉄大牟田線高宮駅改札口左に出てそのまま歩道橋を右隣のビルへ)

参加費:500円(会員以外の方も当参加費でご参加いただけます。)

1. ご挨拶・ご連絡・新年度人事承認

2. 口頭発表

発表者:井上博子

熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。

小田原短期大学保育学科准教授。音楽教育学、欧米文化学を専攻。

主要論文:

「ドイツ音楽史における少年合唱の意義と役割-少年合唱団の現状と課題を踏まえて-」

「ドイツの少年合唱団における発声指導法の研究(I)(II)-発声指導用語の日独比較を通して-」

「少年合唱における変声に関する一考察-我が国とドイツの事例を通して-」

「オルフ・シュールヴェルク《クリスマス物語》音楽劇構成に関する一考察-テルツ少年合唱団の演奏をもとに-」

発表タイトル:

「カール・オルフの舞台作品《月》と《賢い女》に関する一考察
-《カルミナ・ブラーナ》から続く再生の思想-」

発表要旨:

オルフの舞台作品《月》と《賢い女》の2作品は、グリムの『子どもと家庭の童話』を原作としている。オルフは「2つの童話的小品《月》と《賢い女》は結びついているので、一夜のための上演に際しては、同時に上演されることが望ましい」と述べている。

本研究では、《グリム童話》は、どのようにして《童話的小品》となったのか、この2作品が結びつき、同時に上演されることが望ましいのは何故か、またオルフの舞台作品におけるこの2作品の位置や存在の意義、《カルミナ・ブラーナ》との関係性などを考察する。

第 19 回総合文化学会

日時：2019 年 12 月 8 日（日） 午前 10 時～午前 11 時 45 分

場所：福岡市男女共同参画センターアミカス研修室 A

(Phone: 092-526-3755)

(西鉄大牟田線高宮駅改札口左に出てそのまま歩道橋を右隣のビルへ)

1. ご挨拶・ご連絡

2. 口頭発表

①

発表者：山崎浩隆（熊本大学大学院教育学研究科准教授、音楽教育、音楽教育史）

発表タイトル：「音楽鑑賞学習に物語づくりを取り入れることの効果」

発表要旨：

鑑賞学習において知覚・感受を可視化し、聴き方・感じ方を豊かにすることを意図した実践に音楽を図形で表現させることが有効であることが明らかにされ、その方法を用いた実践研究が数多く報告されている。その一つとして「物語づくり」がある。

グループごとに「物語づくり」を行うこと、グループ間でそれらを交流させることが鑑賞学習にどのような効果をもたらすのか、子どもたちが音楽の構造と曲想との関係を明らかにする上でどのような効果があるのかを検討し発表する。 -

-

②

発表者：山口 誠（九州大学専門研究員、哲学）

発表タイトル：

「徳ある人と真なる行為：アンスコムに於ける実践的知識という概念の徳倫理的観点からの理解について」

発表要旨：

アンスコムのテキストに於ける、実践的知識即ち「観察に基づかない知識」に関する内容理解。

『総合文化学論輯』（ISSN 2189-0986）第 12 号刊行 2020.5.1